

連珠っておもしろい

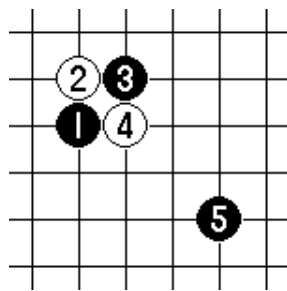
九段 河村典彦

● 第67回 ●

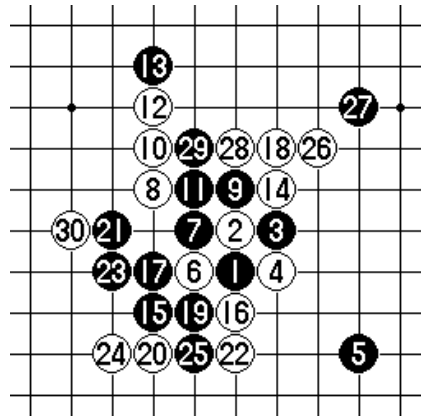
■ 日本での実戦

帰国後、城西連珠会には行っていたが、本格的な実戦としては打ってなかった。結果的に最初の実戦が名人戦1次予選になってしまった。だが、本番のA級は日程があまり良くなく（集合日に長期欧州出張から帰国）、1次戦を通っても2次戦は辞退するつもりでいた。そういう考えで臨んだのが、そもそもいけないのであるが、結果は1勝2敗1分で見事に予選落ちとなつてしまった。3局目の久富戦で安易に防いでしまつて逆転負けを喫したのが痛く、最終の玉田戦では読み違いで後手を引き、そのまま押し切られてしまった。反省する所は非常にあり情けない気持ちにもなつたが、当日

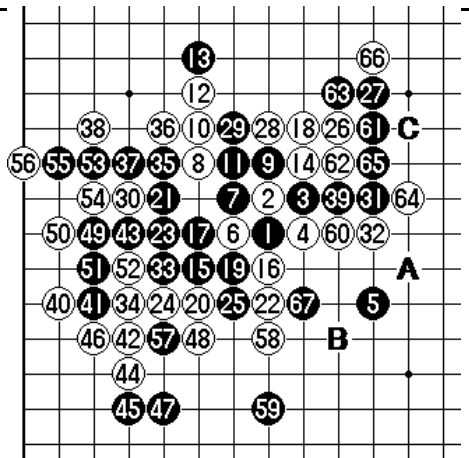
中山君から貴重な情報を入手したので今回はそれをネタにしてみたい。チーム戦でやたら花月切り違いが出ていたので不審に思っていたのだが、以前に流行した黒5の透かし止めが今回復活していた。



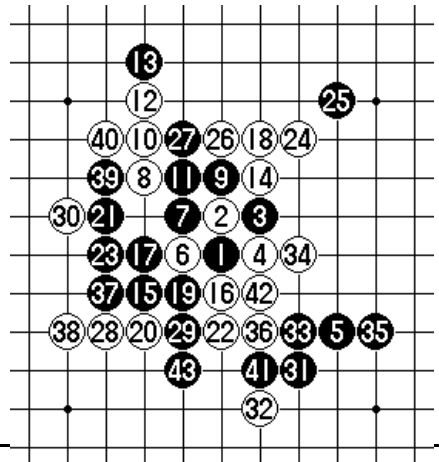
あれ？確かこれは白が良かったはず、と思つたがどうやったら白が良かったかどすつかり忘れていた。思ひ出すのにかなり時間がかかったが、次の図のように打ち進めて、白30で黒勝ちがけない、というのが当時の結論だった。なお、黒13の対は白21に打つて白勝ちとなる。



当時あれこれいじつてみたが、黒31からの追い勝ちがどうしても見つからなかった。今回棋譜が出た時にブラックストーンを使って調べたが黒勝ちではなかった。それでもチーム戦でたくさん打たれていたのを見ると、どうやら黒勝ちらしい。結局ギブアップして1次戦の日に中山君から教えてもらふことになった。なお、その昔は黒31と打つのが有力で、白32に防いだ時に黒33から左辺を消して黒39に止めておく。しつこく白は40から狙つて

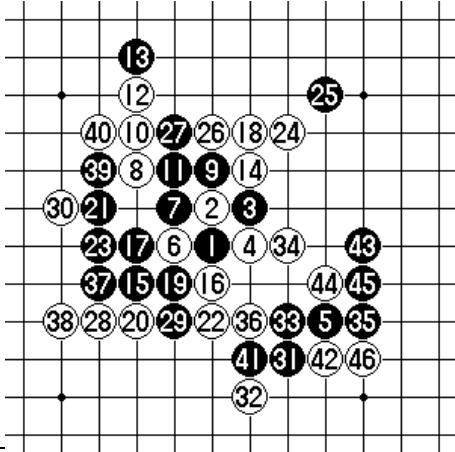


くろるが、四ノビを駆使して凌ぐ。白60と防がれると黒67に結局手が戻り、これでは黒よくて満局だろう。また、右辺が広いのでAとミセるのが筋だが、白Bが先手になるのが痛いし、素直に焦点に止められても勝てない。部分的には黒Cも有力なのだが、これも呼手なので白にいろいろ防ぎがあり、やはりうまくいかない。そんなこんなで「勝ちなし」という結論だけで忘れ去られていたが、今回あつと驚く勝ちがあつた。

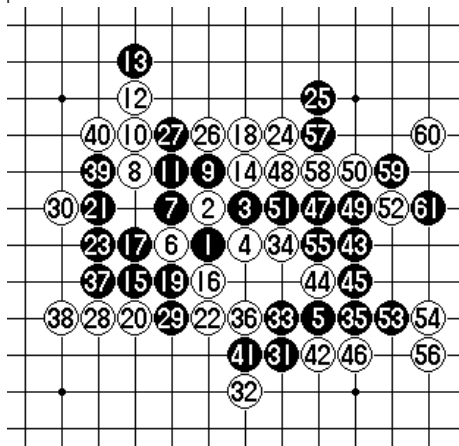


黒31のミセ手が第一歩。白にここを打たれるノリ手を消した意味もある。続く黒33のミセ手も盲点である。白はもちろん34と焦点に止めるが、黒35が意味のある三引き。白36を反対なら簡単に黒勝ちなので、白36に止めるが、一旦四三を黒37、39で消してから黒41が肝要の一手。思わず白42と止めたくなるが、それは黒43の止めがびつたりで黒勝ちとなる。その他、白42を43や他のノリ手も、黒42の四ノビで切つてし

まえば白に四迫いが残らないので黒勝ちである。というところで、白は42と焦点を止めるしかない。ここが一番重要なポイントである。この局面から勝ちを出せ、と言われたらさほど難しくないのでないかと思いが、ここまでたどり着く発想力が常人ではない。さて、黒43からはまだスペースが残っている右辺を目標せよ。黒43と飛んで黒45と三を引く。ありがたいことに、白46上止めだと簡単な勝ちがある。



なので白46だが、ここまて来るともうあと少しだ。今までに見たことがない景色になってるのが斬新である。



黒47が最後の決め手である。一応両ミセになっており、両方防ぐには白48しかない。なお、白57の四ノビで縦の眠三を長連筋にして且つ57の四三を防ぐ手は、黒61の四三が残つており無効になる。勝つ時はつくづくあらゆることがプラスになっている。

黒49からは一本道で、四

ノビをさんざん利かした後、黒59と三を打つが、白に抵抗する術がない。黒61の四三までようやく勝ちにたどり着いた。黒41まで教えてもらつて家で勝ちを見つけた時は、「なるほどねえ」と思わず納得してしまつた。それほどの大発見であつた。この勝ちには中国で見つかつたらしい。こういうことをさせたら中国にはかなわないだろう。今後また連珠世界に今回のチーム戦の講評を載せる予定だが、花月切り違いで黒5の透かし止めの棋譜を何局か解説する予定なので、この背景を理解決した上で読んでいただく、一層面白くなること間違いない。

何でもそうだが、未解決の局面をそのまま残しておくのは良くない。一つ一つ解決していつて結論付けていくことが連珠の発展にもつながる。そこにまた新手が生まれる可能性もある。